こんにちは母さん

永井愛

李燕　昭夫　直文

登場人物

神崎福江（かんざき・ふくえ）	主婦
神崎昭夫（かんざき・あきお）	福江の一人息子
荻生直文（おぎゅう・なおぶみ）	福江の恋人
荻生康子（おぎゅう・やすこ）	直文の長男の妻
木部富幸（きべ・とみゆき）	昭夫の会社の同僚
琴子・アンデション（ことこ・あんでしょん）	福江のボランティア仲間
番場小百合（ばんば・さゆり）	福江のボランティア仲間
李燕（りー・いぇん）	中国人留学生

1

神崎福江の住む、古ぼけた二階家――その、茶の間。
昔ながらの家具や、雑多な品々の場所の占め方からは、この部屋に流れた長い年月が感じられる。
下手には階段。風呂場、トイレに通じる廊下。玄関に通じる短い廊下。上手には台所が半分見えている。
茶の間の向こうは濡れ縁。その向こうには、狭い庭。
二階にはちょっとしたスペースの物干し台があり、すぐそばに、李燕（リーイェン）の下宿する家、番場小百合の煎餅屋、琴子・アンデションの住むアパートが、下町らしい入り組み方で並んでいる。

四月半ばの夕方。
庭先に現われたのは、神崎昭夫。ガラス戸の向こうから中の様子を窺い、音を立てぬように入ってくる様子は、少し怪しい。
昭夫、茶の間を横切り、そっと台所を覗く。戻ろうとして、壁のポスターが目に入る。外国人留学生向けに部屋の提供を呼びかける手書きのもの。

昭夫　（ポスターを読んで）「ひなげしの会」……？

怪訝な表情になり、改めて茶の間を見回すと、あちこちに異変が感じられる。壁際に置かれた木製の古い勉強机。その上には真新しいファックス、ファイルや書類。壁のコルクボードには、数々のメモや、見知らぬ人たちの写真。床には、作りかけの紙の飾り物。昭夫、ふと茶箪笥の抽斗（ひきだし）をあけてみる。そのとき、バッグを抱えた李燕が階段を降りてくる。

李燕　……（中国語）誰？
昭夫　あ……
李燕　（中国語）あなた、何する……
昭夫　いや、私は、ここの……
李燕　何する、黙って入った、おかしいね。
昭夫　あの、あなたは、どなたで……
李燕　どなたあなた。何していた？　どして、あなた、そこあけた？
昭夫　私はね、ここのうちの者なんです。わかります？　ここの、うちの……
李燕　ここは、福江のうちです。
昭夫　そう、その、福江の息子、昭夫です。
李燕　息子？　福江、あなたのお母さんですか？
昭夫　そうです。久しぶりに帰ってきて……
李燕　久しぶり、そこ、あけるですか？

昭夫　ここに財布が入ってるんですよ。母がいないみたいだから、買物に行ったのかなと思って……
李燕　財布探していたのか！
昭夫　だから、買物に行ったのかと、確かめようと思って……
李燕　（中国語）動くな！　座れ！
昭夫　あのう、泥棒じゃないんですよ。
李燕　泥棒！　知ってる、泥棒の単語！
昭夫　じゃないと言ってるんです。福江の子供。泥棒じゃない。
李燕　日本の子供の、そこ、あけるですか？
昭夫　もしかして、あなた、外国人留学生？　そこに留学生のポスターが貼ってあるけど……
李燕　中国人留学生。
昭夫　へえ、中国から来たの？　で、何でうちにいるわけ？　そもそも、何でうちにあんなポスターが、ねぇ、「ひなげしの会」って何？
李燕　いろいろ喋るな。頭、間違う。
昭夫　まいったなぁ……あ、名刺名刺、名刺があります……（と、背広を探るが）あ、さっきそっちに……

と、鞄に手をのばそうとする。李燕、素早く鞄を奥に蹴飛ばす。

昭夫　乱暴だなぁ……
李燕　ナイフありますね？

昭夫　じゃ、あなたが調べてくださいよ。名刺に、神崎って、ここんちとおんなじ名前が書いてあるから。
李燕　黙って座れ。
昭夫　（傍にあった紙の飾り物を持ち上げ）何ですか、これは？（と、座る）
李燕　部屋に飾る。パーティーある。
昭夫　どこで？
李燕　ここで。
昭夫　何の？
李燕　留学生パーティー。知らないか。やっぱり、子供ではないね。
昭夫　二年ぶりなんですよ、ここに来るのは。さっき考えたらそうだった。いろいろと、忙しくってね……
李燕　二年ぶり、黙って入った？　とても、変だ。
昭夫　あのね、二年ぶりだから、驚かそうと思って。普通に帰ってくるんじゃ、つまんないでしょ？　ちょっとシャレっ気出したんですよ。わかる、シャレっ気って？　ま、オシャレな気持ちのことですけど……
李燕　おシャレ気持ち？
昭夫　そうそう、おシャレな気持ちでね、いきなり台所に顔を出して、「こんにちは、母さん」なんて言ってみたかったの。
李燕　お土産は？
昭夫　お土産？

李燕　二年ぶり、お土産ありますね。
昭夫　急に来る気になったんだよ。会社の帰りにふらってさ。お土産なんて、親子の間で……
李燕　二年ぶり、お土産ないか。どこ、オシャレ気持ち。とても親不孝です。
昭夫　親不孝ねぇ……あ、じゃ、子供だってことは、わかってくれたんだ。
李燕　福江帰って来てわかる。帰るときまで動くな。
昭夫　ま、お茶でもいれようか……（と、立ち上がろうとする）
李燕　動くな！
昭夫　実はね、俺、泥棒なんだよ。金、盗もうとしてたんだ。金、出しな。
李燕　……！
昭夫　リストラってわかる？　会社から、もういらないって言われたの。それで、とうとう、食べる物もなくなってね、リストラ泥棒、わかる？
李燕　食物、あげます。真面目なってください。真面目仕事探してください。
昭夫　真面目なだけじゃ、見つからないんだよ、仕事は！
李燕　私は見つけた。朝ホテルは掃除。夜は皿洗い。腰痛いよ。でも、私は頑張ってる。あなたは、日本人。中国人より、見つかる。
昭夫　笑わせんな！　そんなバイトで足りるかよ！　こういう歳のオジサンは、自分が食うだけじゃすまねんだ。日本には今、こういうオジサンがウヨウヨいてね。気ぃつけなよ、ネエちゃん……
（と、凄む）
李燕　わかりました。お金あげます。今しばらくお待ちください。（と、バッグの中を探る）
昭夫　ウソウソ、ね、こういうこともあるといけないからって……

李燕　（小型のスプレーを出して身構える）手上げろ。これ、シューするよ。赤い色つく。洗っても落ちない。泥棒の印だ。
昭夫　おい、ちょっと、冗談だってば……（と、手を上げる）
李燕　出て行け。早く。すぐ警察電話する。
昭夫　待ってよ、悪かったよ、福江の子供だって、神崎昭夫、信じてよ！

玄関の方から、買物の袋を下げた荻生直文が入ってくる。

李燕　この人、泥棒！
昭夫　違います！　私は、ここの……
李燕　自分泥棒言った。金出せ言った。
直文　どなたか存じ上げませんが、本当にそうおっしゃったんですか？
昭夫　つい、脅かしてみたくなっちゃったんですよ、この人があんまり疑うもんだから。
李燕　黙って入って、財布探した。私見た。
昭夫　それは、だから……
直文　財布を探してらしたんですか？
昭夫　私はこの家で生まれたんですよ！　この茶の間で暮らしてたんだ。あなたたちこそ何なんですか。久しぶりに帰ってみたら、こういう、わけのわかんない……
李燕　お土産ない。とても変だ。
昭夫　（直文に）名刺はそこの鞄の中です。そこにひっくり返ってるでしょ。今、この人が蹴飛ばしたもんだから……

直文　ああ、これ。
昭夫　どうぞ、中をお確かめください。自動車会社に勤めてるんです。たぶん、みなさんご存じの……
直文　自動車会社？　そうだ、息子さんは確か……
李燕　泥棒調べる。名刺作れる。
昭夫　泥棒の知らないことだって知ってるよ。え～とね、あ、トイレにビートルズの顔が、落書があるでしょう。あれ、僕が描いたんですよ。
直文　あるある、福江さんが自慢してます。小学生にしちゃうまいでしょって。
昭夫　そうですよ。六年生のときに描いたんです。あれで親父に殴られましてね。
李燕　先トイレ見たね。
直文　殴られた話まではできないよ。福江さんから聞きました。その夜、家出なさったそうですね。
昭夫　ええ、ここまでにしていただけませんか。その話、思い出したくないんです。
直文　じゃ、昭夫さんなんですよね？
昭夫　さっきからそう言ってるでしょう！　あの机だって、僕のです。あれで受験勉強したんですよ。二階にあったのに、何でここに……
直文　昭夫さんのお机だったと聞いております。これはどうも、とんだ失礼を……
李燕　まだ、不思議ね。黙って入った、財布探した……
直文　李燕、バイトの時間はいいのかい？
李燕　もう行く。接着剤あったですか？
直文　うん、あとは一人で大丈夫だから。

李燕　（昭夫に）これ、ヘア・スプレーね。悪かったね。

と、玄関の方へ去る。昭夫、仏頂面で立っている。

直文　どうぞ、お座りください。今、お茶を……

昭夫　ここは、私の家ですので、私は勝手に座りますし、勝手にお茶も飲みますので。

直文　ああ、そうでした。またまた、大変な失礼を……

昭夫　どうぞ、お座りください。今、お茶をいれますから。

直文　はい……（と、座る）

昭夫、茶の支度をしようとするが、どこに何があるのか戸惑う。

直文　（見かねて）お茶関係はそこの棚です。（と、机の傍の小棚を示す）急須のお茶、まだ出ますよ。

昭夫　どなたか存じ上げませんが、ありがとうございます。（と、取りにいく）

直文　あ、私、荻生と申します。荻窪の荻に生まれると書いて、荻生。名は直文です。どうも、ご挨拶が遅れまして、あ、そのお茶碗は……

昭夫　（急須と不揃いな茶碗を二つ取り上げたところで）え？

直文　それ、別の方のです。私のは、あの大きい、寿司屋ので……（と、また指し示す）

昭夫　これですか？

直文　ええ、それをマイカップにしておりまして……

昭夫、茶碗を一つ取り替え、持ってこようとするが、

直文　あの、そっちの派手なお茶碗、それは琴子さんという方ので……

昭夫　琴子さん？

直文　ええ、よく出入りする方なんですが。あの、昭夫さんのお茶碗はどこに？

昭夫　何でもいいですよ、そんなの……

直文　じゃ、失礼して……

と、立ち、茶箪笥から来客用の茶碗を一つ出す。

直文　どうぞ、これを……（と、卓袱台（ちゃぶだい）に置く）

昭夫　それ、来客用じゃないですか。

直文　変ですね、私の方がマイカップで。どんなお茶碗ですか、きっとこちらに……（と、また茶箪笥の方に行こうとする）

昭夫　いいですいいです、来客用で。

直文　そうですか。すいませんねぇ……

昭夫、急須と直文の茶碗を持って卓袱台の前に戻り、傍にあったポットに手をかける。

直文　それ、プーアル茶が入ってます。
昭夫　プーアル茶？
直文　さっきの子、李燕っていうんですけど、あの子のお母さんが大量に送ってくれまして……
昭夫　じゃ、ただのお湯はどこなんです。
直文　あ、台所だ。すいません、さっき沸かして、そのまんま……

と、台所に取りにいく。昭夫、不機嫌にあぐらを組む。

昭夫　（台所に向かって）あなたのお名前、何でしたっけ？
直文　（台所から）荻生です。荻生直文。
昭夫　荻生さん、母はどこに行ってるんです？（と、ポットのプーアル茶を茶碗に注ぐ）
直文　買物です、夕飯の……（と、別のポットを持って出てくる）
昭夫　（これ見よがしに、プーアル茶を飲む）
直文　プーアル茶でよろしいんですか？
昭夫　ええ。面倒臭くなりまして……
直文　身体にいいそうですよ。じゃ、私も……

と、プーアル茶のポットに手を伸ばす。そのポットを昭夫は素早く取り上げ、直文の茶碗に注ごうとする。

直文　（茶碗を両手で持ち）あ、恐縮です、どうも……
昭夫　あなたもよくいらっしゃるんですか？
直文　そうですね、そうたびたびではないんですが……
昭夫　僕は親不孝でしてね、ずいぶん母をほったらかしにしておいたもんですから……何か、ずいぶん、変わったようですね。
直文　ああ、そうらしいです。昔のことは存じませんが……
昭夫　僕、たまプラーザにいるんですよ。そう遠くはないけど、そう近くもないでしょう。こういう距離感って、妙に来るきっかけがなくなるんですよ。
直文　わかります。いつでも会えると思うとかえってねぇ……
昭夫　母はあれですか、留学生の何かに関係してるんですか？
直文　ええ、留学生の方に、安いお部屋を探してあげるっていう、まぁ、ボランティア活動なんですけど、熱心にやってらっしゃいます。ここら辺もお年寄りだけの家庭が増えたでしょう。あいているお部屋を安く貸していただいて、その代わりに、留学生は家事のお手伝いをする。そんなんで、ほら、国際親善を深めようかな、なんて……
昭夫　あのポスターですか？　「ひなげしの会」っての？
直文　ええ、あれあれ。ここ、事務局なんですよ。
昭夫　事務局！　ここが？
直文　ええ、あなたの、あのお机がデスクでして……
昭夫　デスク！　じゃ、本拠地なわけ？　え～っ、何だよ、急に「ひなげしの会」なんて……
直文　歌があったでしょう。（ちょっと歌い）おっかの上、ひっなげしぃの花が～って。この歌から

のネーミングらしいです。中国系の方が多いんで……

昭夫　ネーミングはどうでもいいんですけど、そもそも、何で母がそんなことを始めたのかと……

直文　ああ、お隣のアパートにね、ボランティアに熱心な方が引っ越してらっしゃったんですよ。琴子さんて、さっきのお茶碗の、その方が会長さんなんですけどね、福江さんと親しくなって……

昭夫　「福江さん」って呼ぶんですね……

直文　え？

昭夫　母のことを、「福江さん」って。

直文　お仲間はみんな名前で呼び合うんで、私もつい。私なんかも「直ちゃん」なんて呼ばれちゃって、いやぁ、何とも……

昭夫　じゃ、あなたもメンバーなんですか、「ひなげし」とかの？

直文　まぁ、そうです、はい……

昭夫、直文の持ってきたポットから茶碗に湯を足す。

直文　それっ、ただのお湯です。

昭夫　紛らわしいんだよ、もうっ……

昭夫、ポットを置いて、いきなり寝転がる。

直文　私、きっとお邪魔でしょうね。おいとましてもいいんですが、まだ作り物が残っておりまして。

留学生のパーティーがあるんですよ。その作り物が……今日中に仕上げようと、材料なんかも買ってきてしまいましたし……

昭夫　（急に上体を起こし）さっきの子、まさか下宿してんじゃないでしょうね？　二階から降りてきましたけど……

直文　いえ、李燕は縫い物をしてたんです。エルサルバドルの留学生が、パーティーで寸劇をやるんで、その衣裳をね。

昭夫　エルサルバドル……

直文　ここは事務局ですから、基本的に貸さないんですよ。二階には二間しかありませんし……

昭夫　（また寝転がり）すいませんね、二間しかなくて……

直文　あ～、こりゃどうも、いや、そういう意味ではなく……

昭夫　どうぞ、お作業をなさってください。私のことはいいですから……

直文　そうですか？　じっとしてるのも、かえってうるさいですもんね……

と、買ってきた材料や、出ている鋏や紙で作業を始める。

昭夫　（寝転がったまま天井を見つめ）……中国、エルサルバドル……

直文　（作業をしながら）人生とは予想外なことの連続です。私だって、ほんの十分前までは、こんなことになるとは思いませんでした。材料の買い足しに出て、ここで手作業をする。それは予定の行動でしたけど、その目の前に、あなたが寝転がることになろうとは。（起き上がろうとした昭夫に）あ、寝転がるのがどうとかじゃないんですよ。出会いの不思議です。当然のようでありながら、

出会い方はいつも不思議だ……

昭夫　あなたはちょっと……変わった方ですね。初対面でこんなこと言うの、失礼ですけど……

直文　（笑い）どんどん言ってください。ただの隠居です。暇なジイさん……

昭夫　あの中国人、しょっちゅうここに来るんですか？

直文　お隣の、稲原さんの二階に下宿してるんですよ。「ひなげしの会」の紹介で。

昭夫　ひぇ～っ、稲原の二階にいるの！

直文　稲原さんのご夫婦に可愛がられてますよ。よく手伝いをするらしくて……

昭夫　猫かぶってんじゃないですか。人を泥棒だと、あんなに簡単に疑って……

直文　あ、それでなんですけど……

昭夫　はい？

直文　人生は、ほら、予想外ですからね。財布を忘れてしまったとか、持ち合わせが足りなくなったとか、そういうことがよくあるでしょう。そういうことで、もしお困りなんでしたら、多少のことなら、私が……

昭夫　あのう、今のご発言は、さっきの子の発言と何か関連してますか？

直文　は？

昭夫　私が黙って入ったとか、母の財布を探していたとか……

直文　いや、疑うだなんてとんでもない。ただ、人生にはそういうことがよくあるので、実際、私も電車賃がなくなって、見知らぬ人に借りたことがありますし……

昭夫　（起き上がり）モロ疑ってんじゃないの！　私はねぇ、別に金に困っちゃいませんよ！　おふくろの居場所を財布で判断するのは、昔っからの習慣なんだよ。おふくろがどこに行ったかって、

親父に聞くのがイヤだったの！　だから、自分で確かめたんだ。縞のガマ口がないときは近所で買物、鰐皮の財布がないときは、電車でお出かけ。両方あるのにいないときは、近所でお喋り。そうやって、おふくろの居場所を判断したんだ。コソ泥じゃねぇんだ、俺は！

リュックを背負った福江、玄関の方から入ってくる。リュックからは、長ネギが突き出ている。

福江　昭夫じゃないの。イヤだ、何、怒鳴ってんのよ……

直文　いえ、僕がちょっと誤解をして……

福江　この子がいろいろ言ったんでしょ？　あんた誰だとか……

昭夫　そうですよ。コソ泥と間違われたもんですから……（と、また寝転がる）

福江　何だ、あんたが間違われたの。（直文に）これね、息子なんです。例の、昭夫。

直文　はい、それはもう……

福江　この人はね、荻生さん。直ちゃんって……

昭夫　聞きましたよ。マイカップまであるそうで……

福江　まぁ、ゴロゴロしちゃって。何しに来たのよ、急に……

昭夫　急に来ちゃいけませんかね。親一人、子一人の仲だってのに。

福江　自己チューだわねぇ、相変わらず。来るんなら、電話するなり、ちゃんとアポとってよね。私だって忙しいんだから……（と、縞模様のガマ口を抽斗にしまう）

昭夫　アポ？　アポって言った今？

福江　どうするの？　ご飯、食べてく？　あんたが食べるなら炊かなきゃなんないけど……（と、台所へ入る）

昭夫　アポだってよ、背中にネギしょって……

福江　（リュックを置いて出てきて）直ちゃんとね、湯豆腐しようかって言ってたの。一緒にどう？

直文　いつものことじゃないんですよ。今日はたまたま、仕事が途中なんで……

福江　（直文に）いいじゃないのよ、あわてなくたって。（昭夫に）まぁ、そこら辺、ゆっくり話すから、一緒に食べてったら。お豆腐、ちょっと足りないかもしれないけど……

昭夫　お邪魔じゃないんですかね、直ちゃんに……

福江　いいわよねぇ、直ちゃん？

直文　ええ、あの、昭夫さんさえよろしかったら……

昭夫　ちょっと考えます……

福江　（笑い出し）コソ泥と間違われたの、あんた……

昭夫　何だよ、今頃……

福江　だって、さっきちゃんと笑わなかったから。人相悪いんだわ、あんた……（と、また笑う）

直文　それは、私が悪いんです。よくお話を聞きもせずに……

昭夫　親切でしたよ、直ちゃんは。お金を恵んでくれようとしたんです。こんなの、生まれて初めてだ。

福江　まぁ、直ちゃんも人のいい……こりゃ一本つけようかね。（と、そこら辺を片づけながら）知美さん元気？　顎がガクガクするとか言ってたけど、あれ治ったの？

昭夫　……

福江　いつだったっけかな？　あんたがちっとも心配してくれないって嘆いてたわよ。大輔は？　ちゃんと会社行ってる？（直文に）孫がもう就職だもん、イヤになっちゃう。

昭夫　それよりさぁ、ちゃんと直ちゃんにお礼言ってよ。お金をくれようとしたんだから。言ってやってよ。俺は高給取りだから心配しなくていいって。同期入社のトップを切って部長になったんだからってさぁ……

福江　昭夫！　まぁ、この子は何を言い出すやら……

昭夫　一生に一回ぐらい、自慢したっていいだろう！

福江　……驚いたね。大声出すとお父さんそっくりだ。（直文に）私の亭主、こういう声だったの……

直文　ああ……

福江　似るわねぇ、声って、顔よりも……

直文　それでね、え～とね、これ、材料からいって、うちで作った方がいいかもしれない……（と、紙飾りを持ち上げる）

福江　あら、そう……

直文　何だかんだ、材料がね……（と、紙袋を探して材料を入れる）

福江　すいませんね、こんなのがゴロゴロしちゃって……

直文　（昭夫に）あのう、どうか今日のことはお許しください。どうも、歳をとりますと、つい余計なことを……

福江　もう謝らないでよ。充分仕返ししてますから……

直文　でも、お会いできてよかった……

直文、昭夫に一礼して、玄関の方へ。福江、寝転がる昭夫の手を軽く踏みつけてから、続く。

昭夫　イテッ……
直文　え？（と、振り返る）
福江　いいの、いいの……

二人、玄関の方に去る。
昭夫の携帯電話のベルが鳴る。昭夫、ポケットから取り出し、しばらく迷った後、電源を切る。
福江が戻ってくる。

福江　よくもあんた……怒ってるわよ、私。
昭夫　……
福江　もう湯豆腐の気分じゃないわ。冷奴にしよう。
昭夫　母さん……茶髪にしたんだね。髪型も変わった。
福江　今頃何言ってんのよ。もう茶髪もアキアキで、金髪にするかってとこで、みんなに止められてるってのに……
昭夫　着るモンだって、何だい、それ……
福江　生きてりゃ、いろいろ変わるわよ。割烹着を着た下町の母さんなんての、アテにしてもらっちゃ困るからね。

机の上の電話が鳴る。

福江　（出て）はい？　……はいはい、生きてますよ。……ううん、まだこれから。今日はね、湯豆腐。……は～い、じゃ明日は私の番ですね。それまで生きててくださいよ。じゃあね。（切って）山岸さんのおばあちゃん。毎日、電話のかけっこしてるのよ。「生きてますか」「生きてますよ」って、それだけだけどね。知ってたっけ、俊雄さん、亡くなったの？
昭夫　俊雄さんて、メリンス屋の？
福江　そう、膵臓癌だとかでね、あっけないの。九十過ぎて息子に先立たれるんじゃ……ああ、考えるのよそう。
昭夫　じゃ、メリンス屋どうなったのよ？
福江　孫がさ、カズちゃん、あんた小学校一緒でしょ。あの子が後継いだけど、どうも駄目だね。棚の一番高いとこに、ちっちゃいテレビ置いてさ、日がな一日見上げてんだから……
昭夫　カズちゃん、会社辞めたの！
福江　どっちみち、パッとしなかったみたいよ、会社でも。
昭夫　あいつ、宇宙飛行士になるって言ってたんだ。「ひこうし」って言えなくて、「しこうし」って言ってさ……ま、どうでもいいけど……
福江　昭夫はサラリーマンになりたいって書いたね。
昭夫　え？
福江　小学校の卒業文集。みんなが大きいこと並べてんのに、あんただけサラリーマンって書いたじ

ゃない。お父さんが渋い顔してさ、そんなに足袋職人になるのがイヤかって……でも、石黒先生は褒めたよね、地に足がついた夢でいいとか。私、笑っちゃった。サラリーマンは、昭夫にとっちゃ、宇宙飛行士より遠い遠い、あこがれの職業だったのにね。

昭夫　……

福江　さてと、おばあちゃんに湯豆腐って言っちゃったな。湯豆腐にするか。なぁんか裏切れないのよ、あの人……

と、台所に入る。

昭夫、立ち上がり、机の前に行く。

昭夫　活躍してんじゃない、俺の机……

福江　（台所で）え？

昭夫　この机、小学校の入学祝いだろ。よく覚えてないけどさ……

福江　（台所で）覚えてないの？　あんなにがっかりしたくせに……

昭夫　がっかりしたの、俺？

福江　がっかりしたわよ。「最初っから古い机なの」って。それ、古道具屋で買ったからね。

昭夫　ひでぇなぁ。机ぐらい新しいの買ってやれよ……（と、机の椅子に座ってみる）

福江　（台所で）いろいろ見て回ったのよ、お父さんと。あの頃、スチール製で、本棚や電灯がついてんのが出回ったでしょう。ああいうの、お父さんがよくないって。チャラチャラして品がないってさ……

昭夫　……

昭夫、机の抽斗をあけてみる。中に、本やノートが入っている。昭夫、取り出し、ページをめくる。

福江　（台所で）あの狭い階段を、お父さんと二人で上げたのよ。私の方が上になっちゃってさ、交替したくても、今さら身動きとれなくて……（と、出てきたが）駄目っ、そんなの勝手に見ちゃ……（と、昭夫から本やノートを取り上げる）

昭夫　源氏物語なんて読んでんの？

福江　いいじゃない、何、読んだって……（と、抽斗にしまう）

昭夫　ただごとじゃねぇだろ。ノートまでとっちゃって。カルチャーセンターかなんか行ってるわけ？

福江　区民館よ。ただのとこ。さっきの直ちゃんが先生してるの。

昭夫　直ちゃん、源氏の先生なの？

福江　うん。元は大学の先生でね……

昭夫　どこのぉ……？

福江　お前が受験して落ちたとこ。

昭夫　え～っ、ちょっとそれ先に言ってよぉ……

福江　何で先に言う必要がある？

昭夫　だって、まずいじゃんか、え～っ……

福江　へぇ、それ先に言ってたら、とる態度が違ったわけ？
昭夫　そういうわけじゃないですけど……
福江　やだねぇ、会社人間はこれだから。すぐに人をランクづけしてさ……
昭夫　母さん、どっちが先なのよ。「ひなげし」と源氏とさ……
福江　「ひなげし」が先よ。留学生が日本語勉強するでしょ。あれ、凄いよ。朝働いて、昼学校行って、夜また働いて、帰ってきてまた勉強だもん。それでまた、どんどん喋れるようになるのよね。あれ見てたら、私も脳ミソ使いたくなっちゃってさ。それで、区の新聞あるでしょ、あれで探したの。最初は英語やろうかと思ったんだけど、英語教室、有料でね。そしたら、源氏が無料でさ……
昭夫　じゃ、直ちゃんとは、そこで会ったの？
福江　そうよ。先生だもん。
昭夫　じゃ、何で直ちゃんも、「ひなげし」なのよ。メンバーなんだろ？
福江　うん、「ひなげし」のこと話したら、やるとか言うもんだから……
昭夫　何だかわかんねぇや……

昭夫、卓袱台のそばに戻る。
福江、机の前に座る。

福江　ここに座って勉強すると、妙な気持ちになるんだよ。お前が勉強してたときのこと思い出してね。いろんな跡がついてるでしょ。インクの染みだとか、これは彫刻刀で何か彫りかけた跡だ。結局、大学受験までこれでいっちゃったもんね。いっつもこうやって、背中曲げてた……

と、振り返るが、昭夫は、もう寝転がり、目を閉じている。

福江　昭夫さぁ……会社で何かあったの？

昭夫は答えない。福江もそのまま沈黙する。